

## 「面倒なまちづくり」を通じた社会的包摂

京都大学大学院人間・環境学研究科 本間桃里

フィールドワークを通じて、多くの新しい気づきを得ることができました。

まず、釜ヶ崎では、行政・NGO・民間が協働して独自の仕組みをつくり、日本社会が排除してきた「ないないづくし」の人々を包摂してきたことです。仕事がない、家族がない、住民票がない...さまざまな背景がある人々を受け入れ、人々が抱えるさまざまな困難さを可視化してきた点で、釜ヶ崎は「実は社会に対して貢献している」（ありむら潜さん）とお話されました。釜ヶ崎の歴史的変遷を概観すると、1900年代の木賃宿街に始まり、1960年代には行政がフレキシブルな労働力確保のために、単身男性から構成される「日雇い労働者」のまちづくりを推進しました。街の「おつとめ今日も一日ご苦労さん」の看板、簡易宿舎、たくさんのコインロッカー、作業着の専門店、車のフロントガラスに貼られた求人票などは、労働者のまちと「文化」を象徴するような風景です。ところが1990年代には長期的な経済不況の影響で、ホームレス状態になる労働者が多くいました。

こうした中、釜ヶ崎ではさまざまな活動が展開されてきました。たとえば、野宿を余儀なくされる人々が緊急で駆け込める「あいりんシェルター」があります。大阪府外や西成に長く住む方でも利用でき、無料で寝床（二段ベッド）、シャワー、洗濯機などを利用することができます。トイレはとても清潔で、それは運営者の「人間の尊厳の維持においてトイレがきれいであることは重要である」という心がけが反映しているとのことでした。

また、2000年には民間によるサポート付き共同住宅（サポータティブハウス）が建てられました。サポータティブハウスでは、居住地の確保のみならず、「ゆるやかな見守り」のなかで福祉的な支援を受けたり、社会的なつながりを築いたりすることができます。障害や認知症などを抱えている方にとっても安心なので、特に労働者の高齢化が進む近年は中長期的に滞在を希望する方も多いと聞きました。通常、民間企業が地域に根付くことには困難さを伴うことが考えられますが、ここでは民間企業が集まってNPO法人サポータティブハウス連絡協議会を結成したことで、民間企業同士や地域が協力しやすい体制をつくることができたそうです。

さらに、「中間労働市場（福祉的労働）」の開拓がなされてきたことも、困難を抱える人々を包摂する仕組みの一つで、釜ヶ崎の特徴として挙げられます。フルタイムでの勤務や建設業などの力仕事は困難であっても、この仕組みがあることで、なにかしらのかたちで社会との接点を持ち続けることができます。今回紹介していたのは、NPO釜ヶ崎・高齢者特別清掃事業と、サービスハブ西成の取り組みです。高齢者特別清掃事業は大阪府と大阪市の共同事業で、NPOが委託を受けて実施されています。ゴミの分別や花壇の整備、保育所の塗装など、地域と関わるような仕事をすることができ、それは住民の一員としての意識を高めることにもなっているそうです。ゴミの分別を意識するようになり、まちが綺麗になったとのこと。サービスハブ西成ではさまざまなNPO団体が連携し、多様な活動を行っています。最近始まったヨリドコキッチンでは、お弁当作りを通じて職業訓練をしつつ、自炊の方法を学び、地域のニーズに応えることもできます。こうしたオルタナティブな労働形態があることで、通常の労働市場の枠組みから溢れてしまう人々のセーフティネットになります。特に近年は精神疾患を抱える若者が増えているというお話も伺いました。中間労働市場のようなオルタナティブなシステムの構築は、日本社会全体でも意義のあるものではないかと考えます。

労働や福祉の提供のみならず、人々が表現する場もありました。サービスハブの拠点の一つである「ひと花センター」の入口には、日常生活で感じていることや家族への想いを詠んだ、たくさんの俳句が飾ってありました。今回私たちにお話しして下さったOさんが「俺の俳句見てや！」と眩しい笑顔をしていたのが印象的でした。「炊き出しに 寒風吹きし 腹わびし」、「柏餅 母が作りし 味思い」（Oさん作）。Oさんは16歳のときに九州から関西へ来て集団就職で働き始め、釜ヶ崎には50年近くいらっしやいます。「青寒（あおかん）が一番つらかった」、「ひと花センターに来てから俳句を学んだ」とのことでした。Oさんと一緒にお話ししてくだ

さったNさんも、集団就職の世代で、釜ヶ崎には50年近くいらっしやいます。「楽しいときは？」という学生の質問に対して「今です。生活に余裕ができたので、ボランティアで交通整備をしている」と生き生きと語ってくださりました。

このように、釜ヶ崎のまちづくりが行政による一方的な介入ではなく、ときには市民や団体から行政へ要請を行い、異なる立場の人々を巻き込みながらなされてきたことは大きな発見でした。各アクターが対立するのではなく、協働できることを提示してくれました。ありむら潜さんの「面倒くさいまちづくり」という言葉が象徴するように、さまざまなアクターと話し合いながら進めることは決して簡単なことではありません。しかし、こうした面倒くさいプロセスを踏んできたからこそ、誰もが受け入れられるようなコミュニティが形成されてきたのだと感じました。

現在の街は、多様な人々で混沌としていました。労働者コミュニティ、市営住宅に住むファミリー層、居場所のない子どもたち、介護保険の導入を機に増えてきた女性ヘルパー、カラオケ居酒屋で働く中国系の女性たち、ベトナム系の留学生、活動家、アーティスト、海外からの観光客など…。単身の男性労働者で占めていた、かつての釜ヶ崎の様相から変容しつつあります。こうした急速な変化のなかで発生する新たな課題やニーズに向き合う、まちや人々の活力を肌で感じることができました。

他方、「西成」や「釜ヶ崎」に対して社会のスティグマが根強く残っていることは大きな問題です。子どもたちが遠足で他の地域へ行ったときに「西成」と言いづらいこと（自分たちの街に誇りを持たない）、住所によって就職差別を受けること、西成にすることで家族から「恥」だと思われてしまうこと、インフルエンサーに面白おかしく消費されてしまうといったお話もありました。地域の人々が一生懸命に清掃活動をする傍ら、地域外から来た人々による家電などの不法投棄が山積みになっている現場も目の当たりにしました。外から来た人の不法投棄が西成に対する悪いイメージを再生産させてしまう構造があります。

私自身、釜ヶ崎について何も知らなかったことに気づかされました。今回、実際に釜ヶ崎を訪れて、地域で長年生活・ご活動されてきた方々のお話を直接伺えたからこそ、日雇い労働者や野宿者の方々からみたりアルな日常生活に触れることができました。既存の制度や理不尽な社会構造に対するオルタナティブな仕組みを提示していくことは、日本社会全体で取り組まなければならない喫緊の課題だと考えます。釜ヶ崎で奮闘してきた方々から、日本社会が学ぶことは多いと思います。

このような機会をいただいたことにとっても感謝しております。受け入れてくださった萩之茶屋地域周辺まちづくり合同会社および釜ヶ崎のまち再生フォーラムのみなさま、ご案内してくださったありむら潜さん、お話してくださったOさんとNさん、NPO釜ヶ崎支援機構で精神保健福祉士の笠井さんに、お礼申し上げます。また、ツアーの企画をしてくださった安里先生、ツアーの実現を可能にくださった京都大学アジア研究教育ユニットのみなさま、どうもありがとうございました。



ツアーの様子



ツアーの様子

